

大伴家持との出会い

針原孝之

古代文学会の会員として毎月第一土曜日に出席することになって十年余り経過している。その間にどれほど会員の諸氏から恩恵を受けているかはかりしれない。心から感謝申し上げる。これまで私の考えてきた万葉集研究は、研究というのには痴がましいが万葉後期の歌人とりわけ大伴家持を中心とする問題であった。現在は学問の深さと非力だけが身につまされているが、それでも今までの道程の中で、少しずつ大伴家と時代との関わりが見えてくるように思われる。

今までの大伴家周辺の歌人たちの問題は、表現と思想の関わりに集約され、万葉和歌史の上でどのように捉えられるかを考えるべきだと思っている。

例えば家持については、大伴家の氏族伝承を背景としながら歌の語句に注意して、作品を捉えるという方法で家持論を構築してゆくことも可能となるだろう。

家持の作品を通して今まで表現と心情とを研究史をおさえて一つ一つ追究してきたのである。その研究を深めていくために親密な環境からの体得が必要であると思った。幸いに私のふるさと富山県高岡は万葉ゆかりの地である。

大伴家持が越中国守として就任したのは『続日本紀』によると、「天平十八年六月二十一日従五位下大伴家持を越中守とす」と記さ

れている。この時から越中万葉は展開する。これ以後、家持はこの国府で五年間国守として活躍するのである。国府は今の富山県高岡市伏木町古国府の勝興寺のあたりだと言われている。私は古代文学の研究において志を持ちはじめた頃特に家持に興味を覚えた。

そして越中時代の家持をと思ったって、越中万葉を心がけたのである。万葉集における越中歌の地名研究も必要であるが、まず万葉人の足跡を確かめてみようと言を詠んだと推定される場所を探し求めた。

家持が越中国府にたどりつく経路についてどのような道順でやってきたのだろうかと言を従来の研究を踏まえて考えてみた。また北陸への道として之乎路か砺波路かの二つに大別できるが、この之乎路についても羽咋から氷見に通ずる道だけでは十分ではない。さらに細かな検討が必要であり、どの道であるかを探したのだが今だに解決できない問題である。

越中国府にたどりついた家持はどのような場所に出かけて行って探勝したのかと言を家持の心情を作品を通して想像している。それは家持像に近づくための私なりの方法であった。

家持の越中時代における作品および周辺の人々の作品はどのようなものであったのか。これらの歌は虚構の世界での作品もあると思われるが、まず光景を見てその場で詠んだと考えることにした。すべて場面の設定ということからはじめてみたのである。しかし、その場面設定ということだけで解決できるはずはないし、詠もうとする時と場所、あるいは歌を詠もうとした着想の場所と作品をまとめた場所との違いについても考えねばならないだろう。このよ

うにあれこれと幻想の世界での遊びが作品を理解する上でも役立つのではないかと思う。

家持の越中における作歌時期と場所を考えて分類してみると、異常なまでに春三月に作歌している。北陸の冬は厳しいものであるが、ようやく春の息吹きを感じさせたのは三月ごろであったのだろう。春の挙としての巡行は何月かはっきりわからないため、作歌の制作月も不明である。ただ令抄に巡行は春を以て行なうことになっているので二月か三月かを推定できる。

雄神川紅にはふ少女らし葦附採ると瀬に立たすらし(四〇二一)
婦負川の早き瀬ごとに篝さし八十伴の男は鶴川立ちけり(四〇二三)

立山の雪し消らしも延槻の川の渡瀬燈浸かすも(四〇二四)
之乎路から直越え来れば羽咋の海朝風ざしたり船楫もがも(四〇二五)

これらは越中巡行の歌の一例であるが国府での宴席歌との違いについても考える必要がある。

また越中万葉の重要地は射水郡である。中でも二上山周辺・布勢水海が中心であり、射水平野も注目される。さらに砺波郡、新川郡、婦負郡、能登に区分できる。

朝床に聞けば遙けし射水川朝漕ぎしつづ歌ふ船人(四一五〇)

この歌は国府での家持の歌境を思い知り、遠く射水川を漕ぐ船人の歌が聞こえてくるという、家持の静寂な域に進んだ歌と理解される。

さらに、国府近く能登方面に往来した通り道であった渋谷につい

ては、

渋谷を指してわが行くこの浜に月夜飽きてむ馬暫し停め(四二〇六)

渋谷の崎の荒磯に寄する波いやしくしくに古思ほゆ(三九八六)
としばしば詠まれている。他に二上山、石瀬野、三島野、布勢水海・比美の江・宇奈比川・辟田川等多くの越中歌を家持を中心としたグループの歌人たちによって詠まれている。

山や川の地名が多く詠まれ、また景色の美しさを遠くより眺めていたこともあったろう。

こうして越中万葉に私はふるさととしての愛着と心強さが手伝って大いに万葉人の心に触れたいと思うようになった。そして巡行や遊覧の歌を理解したいと願い「越中賦」についても述べてみたが、十分な考えに到達していない。その道は険しくまた遠い。しかし、私はその道を取り越えて万葉人の心を掴みたいと思っている。